中勘助全集

第六巻

小宮豐隆
和辻哲郎 編集

中勘助全集

第五卷

角川書店

中勘助全集
第五巻

昭和三十六年六月二十日　初版發行
昭和四十一年三月十日　四版發行

定價　一五〇〇圓

著作者　中勘助
發行者　角川源義
印刷者　中内あき子
製本者　鈴木俊一
發行所　株式會社　角川書店
東京都千代田區富士見町二ノ七
振替口座　東京　一九五二〇八番
電話東京（265）七二一一（大代表）

© K. Naka 1961　Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取替へ致します

目次

しづかな流（一）　三

短篇（五）　二二九

妙子への手紙　二三一

故椎貝壽郎氏の思ひ出　二六六

餘生　三二三

まゆみ　三六六

染めかへ　三六九

雀のお宿　三七一

盲目　三七四

あんかう　三六
あとがき　三八一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

しづかな流

(一)

大正十三年一月一日

しづかに時の過ぎてゆくのをみるのはしづかな流をみるやうにしづかである。

十月某日

つるの　山路を
相模の川の　川ぞひに　辿りゆけば
をちこちの　賤がやに
きこゆる　機のおと
きり　はたり　ちやう
圓顔の　あから乙女が
杼（ひ）をなげ　筬（をさ）をひき
もろ足に　ふみ木　ふみたてて
織りなす　白たへ
はしきよし　わがひのもとは

神代より　ひるめの子らが
しら絲の　いやつぎつぎに
豐機　織りつぐらしも

某月某日

もし我我に死がなかつたら生の倦怠をどうしようか。死こそは實に我我に惠まれた甘露である。とはいへ私もまた生の執著をもつてゐる。ただこれ執著である。愛ではない。

善も、惡も、賢も、愚も、……人はその「人」なるがゆゑに悉く醜い。私の愛するのは超人である。聖人である。はた覺者である。

一年を世事にいそしまうよりは一日を淨くしよう。

十四年一月十五日

ひとりふらりととにいでて　夕畑みちをさまよへば

土瓶かた手に鍬肩に　かぶら背負ひくる大黒爺

さてもみごとな天王寺　日本一の大蕪（おほかぶら）

しかも掘りたてほやほや蕪

こなから晩の飲みしろに　一把二分ならよかんべな

二十六日

朝の食事をすませてから仕事にかかるまへ、または仕事に疲れたあげく夕飯までに輕い散歩をのぞむ時には、私は家の東側を南北にとほつて宿と海岸のあひだをつないでるこのへんでの廣い路を歩くことにしてゐる。それはこれから机にむかはうとする私を過勞にしたり、すでにくたびれきつてる私に苦痛を與へたりしないためにその一往復の道のりが適當であるばかりでなく、傾斜や、凸凹や、砂のざくざくがほとんどないことが好ましいからである。そこを私は水瓶を頭にのせてでもゐるかのやうにしづかに足をはこんでゆく。桃が咲くまでは兩側はただ松林と麥畑の綠のひと色で、そのなかに近頃建てかへられた形（かた）ばかりの鎭守の鳥居——鎭守といつても路ばたのわづかにもりあがつたところにある割合に大きい松の根もとに二尺にも足らないほどの石のお宮があるだけのことなのだ。——ばかりが赤くきはだつてゐる。それが色彩にかつゑた私の眼をよろこばせる。

三月二十八日

二三日まへ、もう暗くならうといふじぶんだつた、茶の間に坐つてたら生垣のむかうへ芹を賣る婆さんがきた。襤褸をきて大きな籠を背負つてたが、むくむくとふとつて達者さうにみえた。

「働きどがないんで子供とこんなことしてあるいてゐるんだが、これから二里田舍へ歸らなけりやならないんだから三把ばかり買つとくんなさいね」

といつた。そして　どうしようかしら　と私がすこし思案してるのを芹を知らないと思つたかみつばみたいなもんだ　といふやうな註釋をくはへた。前齒のぬけたあとがみえた。私は買ふことにした。婆さんは料理のしかたまで教へていつた。その芹を今日までも食べてゐる。芹やみつば、私はさういつたものが好きだ。

四月某日

釣りたやなこの春なぎに舟でして大鯛小鯛千匹ばかり

其日

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

天のはらとよさかのぼる朝日子をわが子とぞおもふ春のあしたに

某日

もも鳥の歌のさなかにたたずみて朝山みれば心ゆかしも

紫のむらむら春の山みれば胸どよみして人のこひしき

十八日

ここは昔の東海道　音にきこえし高麗寺

なにやら神のお祭で　人が出さかる市さかる

おでんすゐとんところてん　唐茄子かぼちや瓜の種子

かつぐてんびんかかへる木鉢　馬のわらぢに肥柄杓

日本晴れの上天氣　年に一度の市ぢやもの

あにや買ひこめ　とつつあはまうけろ

おらも蓑笠かふべえな

二十七日

夢。夜らしい。幅の廣いなだらかな坂のところで大勢の人が一寸法師を追ひまはしてゐる。それは蜘蛛男だといふ。彼は追ひつめられて路ばたにゐる私のまへへきた。と、ちやうど蜘蛛が死んだふりをするときのやうに手足をちぢめてどす黑い塊になつてころがつてしまつた。ほんとの蜘蛛よりはすこし大きかつた。私はそれを鍋蓋みたいなものでおさへつけた。が、生來ひどく蜘蛛が嫌ひな私はさうしながらも總毛立つやうな氣味わるさをおぼえた。そこへひとりの子供がやつてきてその塊の腹のへんだとおもふところを小楊枝らしいものでぢゆつと突いた。白い汁がちゆつとはしつた。私は　あつ　と汚らしいいやな氣がして手をはなした。塊はむくむくとまた蜘蛛男になつて逃げだした。顏はわからないが癩病で禿げたやうにところ斑に大きな禿がある。私も人たちといつしよにあとについていつたのだらう。彼は坂のうへのうす暗い軒下で再び私のそばへ追ひつめられてかき消すやうに見えなくなつた。私は自分の身のまはりへ這つてきた蜘蛛が急にゐなくなつたやうな不氣味さをおぼえた。そのとき誰かがいつたやうな氣がする。それともひとりでにわかつたのかもしれない。蜘蛛男は實は我我お互のなかに遍在してるのだと。それを知ると同時にだしぬけにとつつかれはしないかといふ不氣味さはなくなつたが、そのかはりあの

いやらしいものが自分をはじめあらゆる人間の肉、骨、脈管、毛髪の先までも根をはつて宿命的な組成分になつてるといふことに對してたまらない不快を感じた。……

二十九日

いつぞや門のまへの私道をかためるために使つた土の殘りを臺所のまはりにおいたことがあつた。そのなかに種子があつたのか、それとも近くの畑からでも飛んできたものか、入口のそばに砂地のものではないはずのはこべが一株はえた。私はこの草が好きだ。みづみづしい葉や莖、そのさきにぽつちりと蕾をもつて小さな白い花をひらく。とりたてて見どころもないものながらかざりけのないやさしさ、すなほさ、弱弱しさ、うひうひしさをもつて、まだ戀もしらない小娘のやうにみえる。私は子供のじぶんからこの草が好きだつた。

わが宿の　廚（くりや）のまへの
ひとりばえの　はこべら
そをみれば　われはうれし
そをみれば　めぐしうつくし
ももちどり　小鳥の子らに　おくらましもの

鶸もこよ　ひばりもこよ　四十雀もきてはめや
ひとりばえの　このはこべら
小鳥の子らに　おくらましもの

三十日

ある日私は宿の萬屋へいつて粗末な竹籠をひとつ買つてきた。それはこのへんの者が雑魚を入れたり茸とりにさげてあるいたりするもので、大さも形もやや章魚壺に似てゐる。天氣の好いときにをりをり私はその籠に小さなシャベルをいれて西のはうへ十町ばかりはなれたところにある川のほとりへ防風を掘りにゆく。海岸にそうてあらまし不毛の砂原と松林とを區分けするやうにまつすぐにとほつてる路、それは割合に幅も廣く、土を入れてかためられた歩きいい路を速歩ぐらゐの足どりで輕く歩調をとるやうに歩いてゆく。南側の砂原にはさういふところにできる雑草がまばらにはえて、草ぶきの漁具小屋がひとつふたつ、海はみえずに波の音ばかりがきこえてくる。そこにはどうかすると子供たちが茅花をつんでることがある。てんでに柄や色合のちがふ著物をきて丸つこくこごんでる様子がちやうどいろいろな小鳥が餌をひろつてるやうにみえる。まつたく彼らは小鳥かもしれない。彼らはほんとに茅花を食ふのだ。北側は潮風に吹き撓められた小松の林である。時折どこかの犬が二匹出てきて人なつつこく尾をふつてくることがある。ひと

つは茶と白の斑、ひとつは白と黒にぽちぽちのあるのだが、どちらもあんまり恰好がよくない。彼らは別荘の留守番をさせられて退屈してるとみえ頭をなでてやるとあまえるやうに欠伸をしながらいつまでもまつはつてゐる。それから最後にすこし大きな松の林のつめたい蔭をとほりぬけて目あての川の岸へ出るとそこには日あたりのいい雑草の地帯がある。そのなかに防風がまじつてることを私はちやんと見ておいたのだ。目につきやすいところのは人がぢきに掘ってしまふのでなかなか手に入らない。そのかはりここのはまた薔薇や濱豌豆、なでしこ、茅がや、そのほかいろいろな草のなかにまぎれてるのでまだほんの二葉か三葉のその若芽を見つけるのはちよつとひと仕事である。で、あのあるへい細工みたいにてらてらしてそりかへつた葉柄、それは根もとのはうは氣もちのいい白で、先のはうは紅で染めたやうな、さうしてそれらのまんなかに黄色くちぢくれた頭を出してる新芽を運よく見つけたときには私は地蜂の穴をかぎつけた仔犬のやうな狂熱をもつてそのまはりを掘りはじめる。まづシャベルのさきで周圍の盤根錯節をきりひらいて砂をすくひとる。次には不注意に防風の根を傷けないためにシャベルをよして手を使ふ。穴といふものは氣をつけてゐても奇態に漏斗狀になつてゆくもので、だんだん手の先が窮屈になる。牛蒡根の向いてる方に見當をつけて一尺か一尺五寸も掘つたところで根をひつぱるとどこかでぽきんと切れてくる。狹い穴でそれ以上掘りさげることが困難だし、また必要もない。私は日に照りつけられて汗を流しながら見あたりしだい根氣よくやる。さうした仕事がなにか私の性分にしつ

くりあつたところがある。それで「面白い」といふよりはそこからくるところの「心ゆき」をおぼえる。かやうに私がせつせと地の營みをしてるあひだに頭上には雲雀の子らがせいいつぱいに歌を空に響かせて高く高くのぼつてゆく。彼らは天の營みをしてるのである。彼らもまた私のそれに似た心ゆきをおぼえてるのであらう。ただそれは默默とした地の營みよりあでやかにまた華やかである。彼らの聲は空にみちて波の音をも凌いでゐる。

五月二日

毎日二羽の鶸が庭へきてはひとしきり餌をあさつてゆく。たぶん番ひなのであらう。彼らはまだ春のこないうちに私の眼には落葉ばかりとしかみえないところをなにを拾ふのか小忙しく歩いてゐた。時にはまた松の枝につかまつて器用に身をこなしながら松かさの鱗片のすきまへ可愛らしい嘴をさしいれて實をたべてることもあつた。我我人間のあらつぽい味覺をもつてしてもあのよい薫りと脂けにいはれぬうまみのあるその實は彼らの小早い嘴の臼にひかれ、纖細な舌になめられてどんなにか貴い味をにじませたことであらう。そののちひと夜あがりの雨がたびたび降つてそのひと雨ごとに暖氣がくははり、黑ずんでた松の綠が鮮になり、雲雀が囀りはじめたころには彼らも餌を拾ふあひまになにかいふやうになつた。戀と命の潮時がきたのである。また思ひがけないことにはさらさらした砂のなかから無數の松の芽生えが顏を出した。それは植物の芽とい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com